

# 高齢者施設，大学および学生が連携した園芸療法プロジェクトの効果 －施設職員の意識変化－

三宅優紀<sup>1</sup>・磯村葉子<sup>2</sup>・川上静香<sup>2</sup>

<sup>1</sup>吉備国際大学保健医療福祉学部作業療法学科

<sup>2</sup>特別養護老人ホームグリーンヒル順正

e-mail : miyake-y@kiui.ac.jp

## Effects of the Horticultural Therapy Project in which Special Elderly Nursing Homes, University and its Students Collaborate -Changes in the Awareness of Staff who Provided Assistance in Horticultural Activities-

Yuki MIYAKE<sup>1</sup>, Yoko ISOMURA<sup>2</sup> and Shizuka KAWAKAMI<sup>2</sup>

<sup>1</sup>*School of Health Science and Social Welfare, Kibi International University*

<sup>2</sup>*Special Elderly Nursing Home Greenhill Jyunsei*

### Summary

The authors constructed a system in which the university and a special elderly nursing homes for the elderly cooperate in order to carry out and continue horticultural activities while solving issues related to the practice of horticultural activities. The system was named the horticultural therapy project. This study aimed to clarify changes in the awareness of the staff who provided assistance in a horticultural therapy project. A questionnaire survey was conducted involving 20 staff who had participated in a horticultural therapy project at a special elderly nursing home. As a result, regarding the implementation method, there was a request from the staff regarding the frequency and implementation date, but regarding the cooperation between the special elderly nursing homes and the university, all staffs realized the merit of cooperation with the university. The specific merits of the horticultural therapy project were as follows. Since professionals (occupational therapists) are involved as a merit of the horticultural therapy project, (1) it is possible to carry out an evaluation of occupational dysfunction, (2) it becomes easy to secure the place of activity for horticultural activities, (3) time for performing horticultural activities is secured, and (4) it became easy to selected participants. In addition to (1) - (4) , the solution of the horticultural therapy project mechanism is (5) smooth introduction of horticultural activities, (6) securing of expenses, (7) securing manpower, and the time when the supporters are involved with the participants and the supporters. It was mentioned that they had the time to look back at, (8) risk management of participants, and (9) it was easy to obtain understanding from other departments. Since the staff were able to feel these merits, it is considered that they came to have a positive opinion on horticultural activities.

In the future, we would like to investigate how staff interacts with facility users and changes in the life of facility users for the implementation of the horticultural therapy project.

**Key words** : care staff, cooperation, horticulture, special elderly nursing home, questionnaire survey

介護職員，連携，園芸，特別養護老人ホーム，アンケート調査

---

2019年12月11日受付. 2020年7月13日受理.  
平成25年度文部科学省地（知）の拠点整備事業（大学COC事業）  
「だれもが役割のある活きいきした地域の創成」の助成を受けた.

人植関係学誌. 20(1) : 9-18. 2020. 論文（事例研究）.

## はじめに

園芸活動には、高齢者の心身機能の廃用防止や免疫機能を維持させる効果や、新たな生きがいを見つけることで達成感や満足度につながる効果が報告されている(杉原ら, 2006; 東方ら, 2010; 増谷, 2012; 寺岡ら, 2012)。一方で、園芸活動の導入や実施には、活動場所や資金の確保などのハード面、マンパワー不足やスタッフの意識の持ち方などソフト面において様々な課題があることが先行研究よりわかっており(藤田・萩原, 2003; 大竹ら, 2008; 三宅ら, 2014; 増谷・太田, 2015; 神田ら, 2019)、これらの課題を解決するための提案や実践も行われている。例えば、大竹ら(2008)は、施設職員のみでは園芸活動の指導ができないこと、時間的に制約があることなどの理由からボランティアの関与が必要と述べている。神田ら(2019)は、園芸活動を持続的な活動にするためには、施設職員に頼ることなくマンパワーを確保できるスタッフ体制の構築が必要とし、東北地方の農村地域での実践事例を報告している。これらの報告からは、施設職員と外部者との連携が課題解決に有効になる場合があることを示唆している。

著者らは、これらの園芸活動実践に関する課題を解決しながら園芸活動を実施・継続していくために、2013年に、教育機関であるA大学作業療学科(以

下、大学)とB特別養護老人ホーム(以下、施設)が連携した体制の構築を行った。その体制を園芸療法プロジェクトと名付け、現在まで活動を続けている。本園芸療法プロジェクトの効果の検証は、参加者を対象としたものを中心にこれまで報告してきた(三宅・岩田, 2020; 澤田ら, 2019)。一方、園芸療法プロジェクトが先に述べた課題を解決できるかどうかを明らかにするには、大学との連携によって職員の意識がどのように変化したかを調べるが必要と考えられる。そこで、本報告では、園芸療法プロジェクトに参加した施設職員に焦点を当て、施設職員が感じる園芸療法プロジェクトの効果について、アンケート調査により明らかにすることを目的とする。

## 園芸療法プロジェクトの概要

小浦ら(2001, 2002, 2006)は、高齢者福祉施設、精神科病院および発達障害児施設などで園芸活動を実践し、園芸活動を提供した対象者だけでなく、関わるボランティアなどすべての人々の心理・行動面などに好影響があったことを明らかにしている。園芸療法プロジェクトは小浦らの取り組みを参考に、それに関わる高齢者、施設、大学および学生の各々にメリットがあることを期待した活動である(第1図)。このうち施設入所高齢者に対する効果についてはすでに報告が

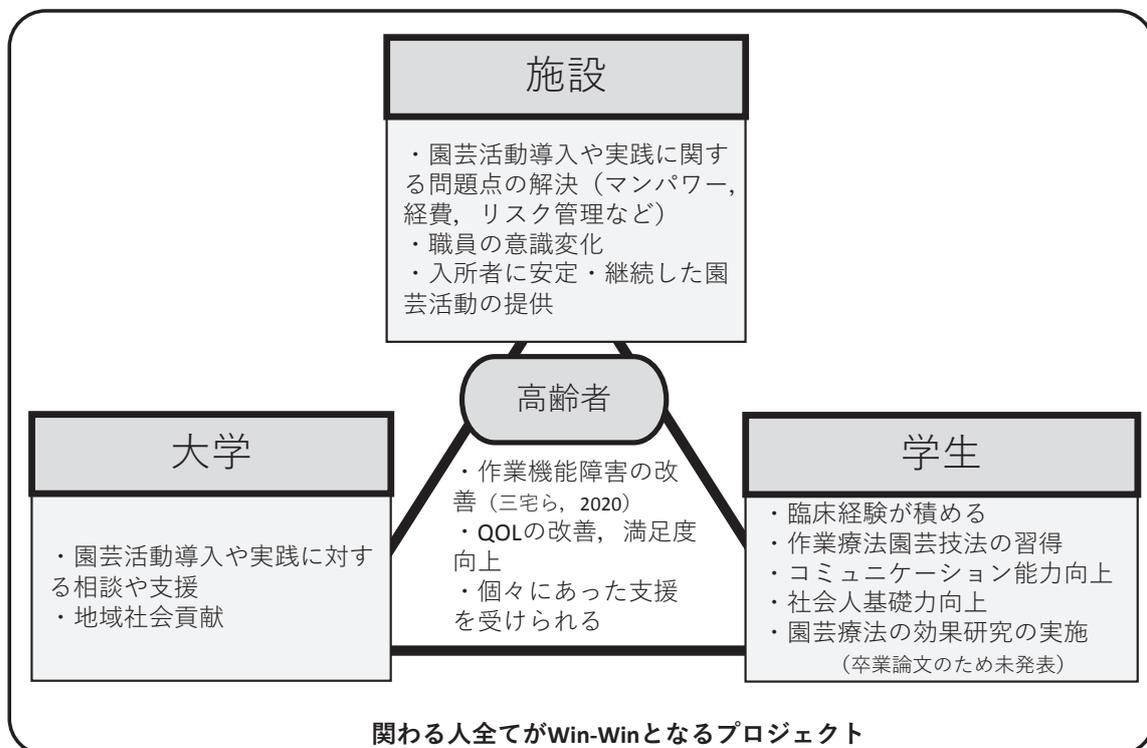


Fig. 1. An image of the horticultural activity project.

第1図、園芸療法プロジェクト全体像のイメージ。

施設、大学および学生が連携して取り組むことで、関わる人全てがWin-Winとなることを想定しているプロジェクトである。各々ができることと得られるメリットについてまとめた。



Fig. 2. Environment in the special elderly nursing home.

第2図. 施設環境.

- A) 不要になった台を改造して、レイズドベッドを作成した。昇降可能なため、車椅子乗車でも立位でも作業ができる。  
 B) 環境整備を行った屋外テラス。広いテラスでホースによる水やりができるよう水道設置を行った。  
 C) 夏は、ゴーヤ、朝顔、風船かずらのカーテンを作り、屋内からも野菜の成長が確認できるように環境整備をしている。

なされている（三宅・岩田，2020）。

園芸療法プロジェクトの実施にあたり、施設職員、作業療法士である大学教員（以下、作業療法士）および学生が協力して施設的环境整備を行った。出入口周囲の片付け（車椅子通路の確保）を行い、さらに屋外作業用のレイズドベッドの作成、テラスへ水道設置を行った（第2図）。水道設置など工事に掛かる費用は施設側が負担した。園芸活動実践にかかる材料（苗、プランターなど）は、学生の臨床体験および作業療法士の研究の場として活用するため学科予算および共同研究費などで負担した。

園芸活動は月に1～2回、60分程度の活動、参加人数は約30名（施設入所者約20名+ショートステイを利用し参加希望のある利用者約10名）である。施設入所者は毎回参加しているが、体調不良、入浴時間や診察時間等と重なり参加できない時もある。活動は参加者を5～7人程度の小グループに分け、より細かな説明や支援ができるようにしている。園芸活動を支援するスタッフは、施設職員からは園芸療法委員2～3名（ケアマネージャー、ケアワーカー）、大学からは作業療法士1～2名と学生3～5名で構成している。個別の支援を必要とする参加者には学生がマンツーマンで付き添い、アドバイザーとして作業療法士が対応し、具体的な支援方法をその場で指導している。植物の育成や、植物を用いた創作活動を園芸活動とし、田植え、稲刈り、寄せ植え、種まき、収穫などの季節を感じられるもの、植物や花を用いた苔玉作り、クリスマスリース作り、押し花などを行っている（第3図）。園芸活動後には、活動内容の振り返り、良かった点、課題点、参加者の様子等について、施設と大学の双方のスタッフで情報交換を行っている。

## 対象と方法

### 1. 倫理的配慮

本研究は、吉備国際大学倫理審査委員会による承認を得た（承認番号19-32）。文書を送付する対象施設の施設長と介護部門の責任者に、調査の目的および方法、個人は特定されないこと、研究成果の公表について文書で説明した。

### 2. 対象者

施設で園芸療法プロジェクトへの参加経験があり、支援者として関わったことのある職員とした。

### 3. 調査方法

介護部門の責任者にアンケート用紙を送付し、対象者にアンケート用紙を配布してもらい、回答を依頼した。記入後の用紙は専用の封筒に入れてもらい、介護部門の責任者に提出してもらった。用紙配布後、3週間を目安に回答を求めた。調査期間は、2019年10月～11月であった。

### 4. 調査内容

アンケート作成は、神田ら（2014）、増谷・太田（2015）および三宅ら（2017）の調査を参考に作成した。

調査内容は、①職員の基本属性、②職員からみた園芸活動の実施方法の評価、③園芸活動実施による職員からみた参加者の変化について、④園芸療法プロジェクトが職員に与えた影響、⑤職員からみて園芸療法プロジェクトが解決できる園芸活動導入・継続に関する問題・課題、⑥自由記載とした。

まず、①職員の基本属性は、性別、年齢、職種、認知症ケア経験年数、園芸活動（園芸療法プロジェクト以外）の経験の有無、園芸活動への興味の有無、園芸療法プロジェクトの園芸活動への参加回数を聞いた。②職員からみた園芸活動の実施方法の評価は、頻度、

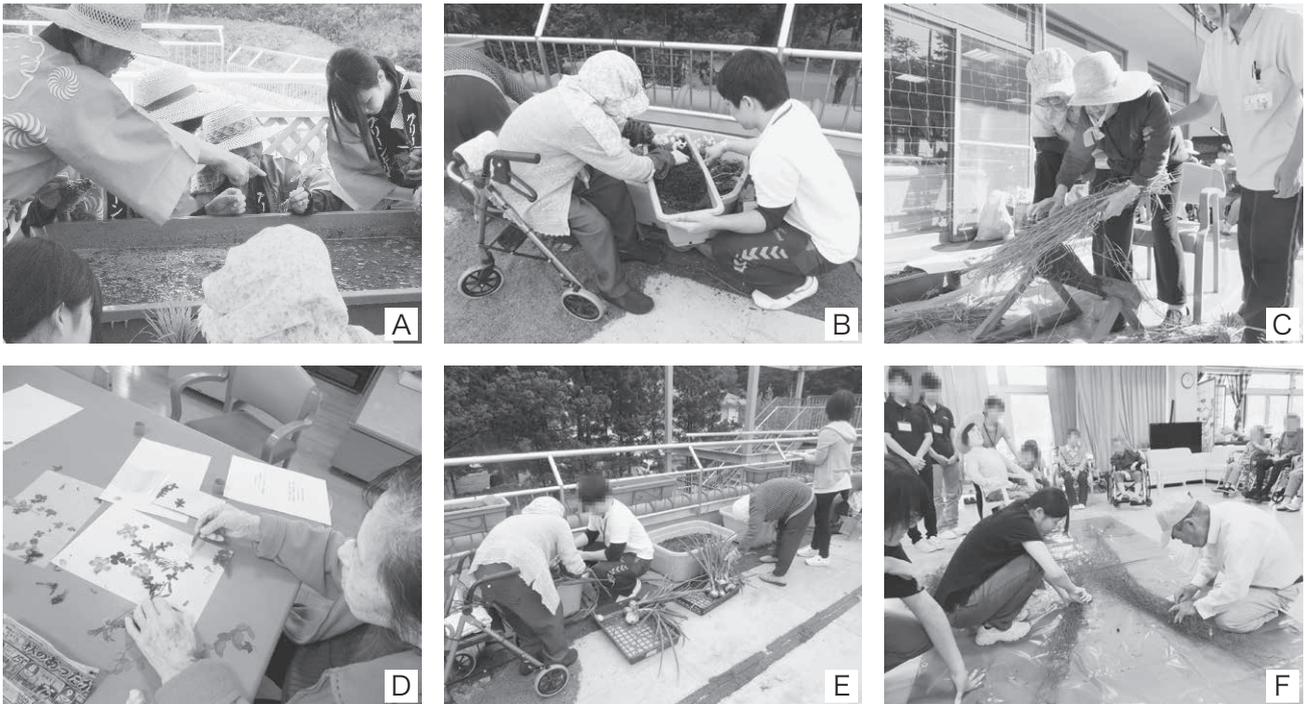


Fig. 3. Horticultural activity in special elderly nursing home.

第3図. 施設での園芸活動.

- A) 6月に行う田植え. 農家をされている施設職員から稲の苗を提供してもらっている.  
 B) 参加者と学生が花の寄せ植えを行っている. 学生は参加者の能力を把握した上で支援をしている.  
 C) 11月に行う脱穀作業. 千歯という器具を用いて作業を行っている. 参加者の中には昔のことを思い出し、自然と立ち上がり、作業される方もいる.  
 D) 押し花アート作り.  
 E) 参加者から「もう抜かなきゃいけないね」と声があり、その日に作業をすることもある. 通常業務に支障がない程度に、職員や学生が活動に参加する. 収穫した野菜は施設内で調理し食べたり、秋祭りで販売する.  
 F) かかし作り. 地域のボランティアの方に協力してもらうこともある.

時間、内容、参加人数、施設・大学・学生の連携について、「とても良い」、「やや良い」、「ふつう」、「やや悪い」、「とても悪い」の5件法とした。③園芸活動実施による職員からみた参加者の変化については、三宅ら（2017）を参考に、作業機能障害の4種類（作業不均衡、作業疎外、作業剥奪および作業周縁化）を表現できる質問文を各種類で3つずつ設定した。作業不均衡は、日々の作業バランスが崩れた状態、作業疎外は、作業に対して意味を見いだせない状態、作業剥奪は、外的要因によって作業ができない状態、作業周縁化は、多くの人が価値を認めるような作業を行えない状態である（寺岡・京極，2014）。作業機能障害の視点で評価することで、高齢者が抱える生活のしづらさを捉えることができる。それら以外に、身体症状、認知症状、精神症状といった機能面の改善についても回答を求めた。回答は、「非常によく当てはまる」、「かなり当てはまる」、「おおむね当てはまらない」、「全く当てはまらない」の4件法とした。④園芸療法プロジェクトが職員に与えた影響については、吉備国際大学園芸療法プロジェクト（2017）の報告書にある質問文を参考にした。具体的には著者による観察を通じて、職員が特に実感していたと思われる、業務遂行につい

て2問（「学生が月に1～2回訪問することで業務量が増えた」、「学生の行動によって通常業務を妨げられた」）、参加者について2問（「1人の参加者へゆっくり関わる時間が持たた」、「参加者の新たな一面に気づく機会となった」）、学生について1問（「継続して学生には来て欲しいと思う」）の計5項目に対して、「非常によく当てはまる」、「かなり当てはまる」、「おおむね当てはまらない」、「全く当てはまらない」の4件法とした。⑤職員からみて園芸療法プロジェクトが解決できる園芸活動導入・継続に関する問題・課題について、先行研究（大竹ら，2008；増谷・太田，2015；神田ら，2019）と著者らの実践経験を参考に、「園芸活動のスムーズな導入」、「園芸活動の活動場所の確保（整備も含める）」、「園芸活動を行う時間の確保」、「経費の確保」、「マンパワーの確保」、「園芸活動の知識」、「参加者の選定」、「参加者のリスク管理」および「他部署から理解を得ること」について、「解決できた」、「わからない」、「解決できない」の3件法で回答を求めた。

## 5. 分析方法

職員からみた園芸活動の方法の評価について、「とても良い」と「やや良い」をまとめて「良い」、「やや悪

い」と「とても悪い」をまとめ「悪い」とした。園芸活動実施による参加者の変化、園芸療法プロジェクトが職員に与えた影響は、「非常によく当てはまる」と「かなり当てはまる」をまとめ「当てはまる」とした。これらについて単純集計を行った。

## 結 果

20名に研究協力を依頼し、20名から同意が得られた(回収率100%)。

### 1. 職員の基本属性 (第1表)

対象者は男性10名、女性10名であった。年齢は20歳代4名(20%)、30歳代7名(35%)、40歳代1名(5%)、50歳代6名(30%)、60歳以上が2名(10%)で、30歳代と50歳代が多かった。職種は全員が介護職であった。認知症ケア経験年数は、3年未満はおらず、3年以上5年未満2名(10%)、5年以上10年未満10名

Table 1. General characteristics of staff.  
第1表. 職員の基本属性.

項目	人数	%
性別		
男性	10	50
女性	10	50
年齢別		
20歳代	4	20
30歳代	7	35
40歳代	1	5
50歳代	6	30
60歳以上	2	10
職種		
介護職	20	100
看護職	0	0
その他	0	0
認知症ケア経験年数		
3年未満	0	0
3年以上5年未満	2	10
5年以上10年未満	10	50
10年以上15年未満	4	20
15年以上	4	20
園芸活動(園芸療法プロジェクト以外)経験		
あり	11	55
なし	9	45
園芸活動への興味		
あり	18	90
なし	2	10
園芸療法プロジェクトの園芸活動への参加回数		
3回未満	10	50
3回以上5回未満	2	10
5回以上10回未満	3	15
10回以上15回未満	1	5
15回以上	4	20

(50%)、10年以上15年未満4名(20%)、15年以上4名(20%)であった。園芸活動(園芸療法プロジェクト以外)の経験の有無は、経験あり11名(55%)、経験なし9名(45%)であった。園芸活動の興味の有無は、興味あり18名(90%)、興味なし2名(10%)であった。園芸療法プロジェクトの園芸活動への参加回数は、3回以下が最も多く10名(50%)であり、3回以上5回未満2名(10%)、5回以上10回未満3名(15%)、10回以上15回未満1名(5%)、15回以上は4名(20%)であった。

### 2. 職員からみた園芸活動の実施方法の評価(第2表)

月1~2回の園芸活動の実施について、「良い(50%)」と「普通(45%)」が同程度だった。「活動時間」、「園芸活動の内容」、「参加者の人数」は、「良い」の割合が「普通」の2倍以上だった。「施設と大学の連携」は19名が「良い」と回答した(1名未記入)。

### 3. 園芸活動実施による職員からみた参加者の変化について(第3表)

作業機能障害の改善については12項目全てにおいて、回答した職員の7割以上が参加者の変化を感じていた。特に、作業不均衡に関わる1項目(「役割の獲

Table 2. Current status of practicing horticultural activities at the facility.

第2表. 職員からみた園芸活動の実施方法の評価.

項目	人数	%
実施頻度について(月1~2回)		
良い	10	50
普通	9	45
悪い	1	5
活動時間について(1時間程度)		
良い	15	75
普通	5	25
悪い	0	0
活動内容について		
良い	16	80
普通	4	20
悪い	0	0
参加人数について(通常30名程度)		
良い	13	65
普通	6	30
悪い	1	5
連携した取り組みについて <sup>2</sup>		
良い	19	100
普通	0	0
悪い	0	0

<sup>2</sup>連携した取り組みについては、未回答者が1名いた。

得)], 作業疎外に関わる全3項目, 作業剥奪に関わる全3項目, 作業周縁化に関わる1項目(「できることを周囲に認めてもらえた」)の計8項目では9割以上の職員が改善したと感じていた。一方, 「身体機能の改善」と「認知症状の改善」について, 「当てはまる」と回答した者は5~6割程度だった。

#### 4. 園芸療法プロジェクトが職員に与えた影響 (第4表)

「学生が月に1~2回訪問することで業務量が増えた」は4名(25%), 「学生の行動によって通常業務を妨げられた」は2名(13%)が「当てはまる」と回答し, マイナスのイメージを持っていた。一方, 「参加者の新たな一面に気づく機会となった」と「継続して学生には来て欲しいと思う」は全ての回答者がプラスのイメージを持っていた。

#### 5. 園芸療法プロジェクトが解決できる園芸活動導入・継続に関する問題・課題 (第5表)

「解決できた」の割合が多かったのは, 「園芸活動の活動場所の確保」, 「園芸活動を行う時間の確保」および「参加者の選定」の3項目だった。「園芸活動のスムーズな導入」, 「マンパワーの確保」, 「園芸活動の知識」, 「参加者のリスク管理」および「他部署から理解を得ること」の5項目では「解決できた」と「わからない」の割合が同程度(人数差が2人以内)だった。「わからない」が多かったのは, 「経費の確保」の1項目だった。

#### 6. 園芸療法プロジェクトに関する職員へのアンケートにおけるコメント (第6表)

園芸療法プロジェクトに対する「良かった点」と「課題・要望」がそれぞれ5, 6名からあげられた。

Table 3. The effect of horticultural activities.

第3表. 園芸活動実施による職員からみた参加者の変化について.<sup>2</sup>

	当てはまる(%)	概ね当てはまらない(%)	全く当てはまらない(%)
<b>作業不均衡</b>			
生活のバランスの改善	14(74)	5(26)	0(0)
役割の獲得	17(94)	1(6)	0(0)
日中活動量増加	16(84)	3(16)	0(0)
<b>作業疎外</b>			
生きがいや趣味を獲得できた	19(100)	0(0)	0(0)
達成感が得られた	19(100)	0(0)	0(0)
栽培や収穫を楽しめた	19(100)	0(0)	0(0)
<b>作業剥奪</b>			
屋外の環境で活動する機会が得られた	19(100)	0(0)	0(0)
植物に触れる機会が得られた	19(100)	0(0)	0(0)
周囲の人との会話をする機会が増えた	18(95)	1(5)	0(0)
<b>作業周縁化</b>			
できることを周囲に認めてもらえた	18(95)	1(5)	0(0)
周囲の人から関心を持ってもらえた	14(74)	5(26)	0(0)
周囲から感謝された	14(74)	5(26)	0(0)
<b>身体機能の改善</b>			
身体機能の改善	10(53)	9(47)	0(0)
認知症状の改善	12(63)	7(37)	0(0)
精神状態の改善	17(90)	2(11)	0(0)

<sup>2</sup>未回答者がいたため, 回答者数の合計は設問ごとに異なる。

Table 4. The impact of horticultural activity project on staff.

第4表. 園芸療法プロジェクトが職員に与えた影響について.<sup>2</sup>

	当てはまる(%)	概ね当てはまらない(%)	全く当てはまらない(%)
学生が月に1~2回訪問することで業務量が増えた	4(25)	8(50)	4(25)
学生の行動によって通常業務を妨げられた	2(13)	11(69)	3(19)
1人の参加者へゆっくり関わる時間が持てた	11(69)	5(31)	0(0)
参加者の新たな一面に気づく機会となった	16(100)	0(0)	0(0)
継続して学生には来て欲しいと思う	16(100)	0(0)	0(0)

<sup>2</sup>未回答者が4名いたため, 回答者数の合計は16名である。

## 考 察

### 1. 職員からみた園芸活動の実施方法の評価

実施頻度（月に1～2回）は、他項目に比べて評価が低かったが、これは「2～3週間に1度くらいの頻度が良い」と1名からコメントがあったことから、「良い活動のため頻度を増やしてほしい」という要望と捉えることもできる。また、意見の中には実施日については「入浴等がない日に行ってくれると助かる」とコメントがあった。平日に園芸活動を実施すると、参加者の入浴時間と重なり、参加できない者が出てしまうためこのようなコメントがあったと考える。

このように、職員からは頻度や実施日について要望があったが、園芸療法プロジェクトには学生が参加しているため、授業カリキュラムの関係上、実施頻度を増やすことや曜日・時間帯を毎回変更することは難しい。そのため現状での実施が限界であろう。

評価が高かったのは「連携した取り組み」であり、職員は大学と連携するメリットを実感していたようだった。具体的にどのようなメリットが得られたのかについては2.以降で考察する。

### 2. 職員から見た園芸療法プロジェクトに参加した参加者の変化について

園芸療法プロジェクトを対象とした本調査では、職員は機能面よりも作業機能障害の改善に効果を感じ、作業周縁化は70%以上の職員が効果を感じていた（第3表）。以前、筆頭著者は、岡山県と兵庫県の高齢者施設を対象とした園芸活動の実態調査（三宅ら、2014）を作業機能障害の視点で行った。その結果は、作業不均衡、作業疎外および作業剥奪の改善に効果を感じている高齢者施設が多く、作業周縁化の改善に効果を感じている施設は40%弱であり、今回の研究とは異なる結果であった。それでは今回の結果はなぜ得られたのか、その理由として、様々なアイデアやノウハウを持つ大学が園芸療法プロジェクトとして介入したため、施設だけでは思いつかない「作品のお披露目」や「参加者全員で感想を述べる」等の機会を園芸活動スタッフがもうけたこと、地元ケーブルテレビや新聞社に、この取り組みを発信する活動を行ったことが考えられる。さらに、園芸活動時に作成した作品を施設の秋祭りで学生たちと販売したことで、地域住民や参加者の家族からも喜ばれていたところを職員が目にし

Table 5. Problems and tasks related to the introduction and continuation of horticultural activities that can be solved by the horticultural activity project.

第5表. 園芸療法プロジェクトが解決できる園芸活動導入・継続に関する問題・課題.

	解決できた(%)	わからない(%)	解決できない(%)
園芸活動のスムーズな導入	9(45)	10(50)	1(5)
園芸活動の活動場所の確保（整備も含める）	14(70)	5(25)	1(5)
園芸活動を行う時間の確保	14(70)	5(25)	1(5)
経費の確保	7(35)	13(65)	0(0)
マンパワーの確保	8(40)	10(50)	2(10)
園芸活動の知識	10(50)	9(45)	1(5)
参加者の選定	12(60)	8(40)	0(0)
参加者のリスク管理	9(45)	10(50)	1(5)
他部署から理解を得ること	9(45)	11(55)	0(0)

Table 6. The comments from staff for horticultural activity project.

第6表. 園芸療法プロジェクトに関する職員へのアンケートにおけるコメント.

コメント	人数
1. 園芸療法プロジェクトの良かった点(コメント記入数6名)	
参加者の活動している様子を見て、利用者の方からいろんな言葉が引き出せる	1
利用者の生き生きとした笑顔を見ることができた	1
1つ1つ見て、聞いて、感じて、五感を感じることもできた	1
植物を通じて共通話題ができた	1
作り方を尋ね教えていただくことで、利用者の方々とのコミュニケーションが深まった(園芸が)刺激となり、良かった	1
2. 課題・要望(コメント記入数5名)	
入浴など何も無い日に行ってくれると助かる	1
少人数のグループであればもっとよくなる	1
2～3週間に1度くらいの頻度が良い	1
参加者が多く、異食など目が行き届かないことがあるため、活動場所を移動してもよいと思う	1
感染時期の来所について、賛否両論ある	1

ていたからとも考えられる。

園芸療法関連の先行研究では、心身機能や認知機能の評価（杉原ら，2006；寺岡ら，2012）が主で、作業機能障害の評価はなされてこなかった。その理由は、作業機能障害を簡易に評価できる手段がなかったことや作業機能障害の種類が整理が不十分だったことが考えられる。さらに、臨床場面におけるクライアントの作業機能障害の評価は主に作業療法士が行うことが多いが、園芸療法研究においては作業療法士が関与することが少なかったことも考えられる。しかし、維持期の介入の効果を判定する上で、参加者の生活の変化を捉えることは重要な視点（三宅ら，2014）である。園芸療法プロジェクトでは、大学教員である作業療法士が主導しているため、作業機能障害の評価が可能となっている。そのため、先行研究にある心身機能、認知機能の評価はもちろん、今までの研究や実践では捉えられていなかった作業機能障害についても評価が実施できることは園芸療法プロジェクトの大きなメリットといえる。

### 3. 園芸療法プロジェクトが職員に与えた影響

回答した職員全員が、「参加者の新たな一面に気づく機会となった」と回答していた（第4表）。自由記載（第6表）には、「利用者からいろいろな言葉が引き出せる」、「活き活きとした笑顔を見ることができた」、「植物を通じて共通話題ができた」と肯定的な意見があった。このように、農・園芸活動が参加者のみだけでなく、指導・援助の立場の人にも良い影響があったことは、先行研究（藤田・萩原，2003；神田ら，2014）でも報告されている。

我が国の介護現場は人手不足であるため、十分に園芸活動が行えなかったり、職員が参加者にゆったりとした気持ちで関わることができず、前述の職員への良い効果が得られにくいケースもあると考える。その解決策として、神田ら（2019）は職員に頼らずにマンパワーを確保できる体制構築を挙げている。その体制構築の一例として、園芸療法プログラムは職員への効果をより得られやすくすることができたと考える。すなわち、大学の教員と学生が介入したことで、支援者が多く確保され、職員は参加者の能力を認識できる余裕を持てるようになったからと考える。さらに、大学の介入によって、支援者同士の振り返りの機会が設けられたことや、専門職（大学教員を兼ねる作業療法士）からの視点が得られたことも効果を高める一因になったと考える。このような効果が得られやすい環境を整えたことが職員に対する園芸療法プロジェクトのメリットであったと考える。

### 4. 園芸療法プロジェクトが解決できる園芸活動導入・継続に関する問題・課題

「解決できた」の割合が多かったのは、「園芸活動の活動場所の確保」、「園芸活動を行う時間の確保」および「参加者の選定」の3項目だった。施設と大学が連携し、園芸活動導入時よりこれら3項目に対して施設の実情に応じた対応が行えたため、解決できたと実感されたと考える。特に、「参加者の選定」に関しては、職員が園芸活動への参加が難しいと感じていた人でも作業療法士や学生が場所の設定や参加者の評価・支援をすることで、参加できるようになったと考える。小浦（2013）によると、作業療法士は、個々の施設や利用者に適した園芸活動の提案は得意とされており、園芸療法プロジェクトにおいてもその長所を活かすことができたといえる。

一方、園芸療法プロジェクトのメリットが生かされ、職員に課題と感じさせず、改善できる可能性のある項目は、「園芸活動のスムーズな導入」、「経費の確保」、「マンパワーの確保」、「参加者のリスク管理」および「他部署から理解を得ること」の5項目と考える。すなわち、「園芸活動のスムーズな導入」について、導入初期より関わっている職員は、大学側と調整を重ねてきたためスムーズに導入できたことを把握しているが、途中から参加してきた職員はそのことを把握していない可能性がある。「経費の確保」について、実践にかかる材料費は大学側が一部負担することが決まっていた。施設のみで園芸活動を実践する時よりも職員に負担感を感じさせなかったために、「わからない」の回答が多かったと考える。「マンパワーの確保」について、作業療法士や学生が毎回参加し、支援者を確保できたため、職員にマンパワー不足を感じさせなかったと考える。「参加者のリスク管理」について、作業療法士や日頃関わっている職員がリスクを最小限に抑えるよう対処しているため、職員にリスクを感じさせることはなかったと考える。「他部署から理解を得ること」について、園芸療法プロジェクトとして介入することが施設側の意向により決まっておられ施設側の協力体制は整っていたため、意見の違いや対立は感じられなかったと考える。

一方、園芸療法プロジェクトのメリットが活かされたとは言い切れず、今後に課題を残した項目は「園芸の知識」であった。コメント欄に「作り方を尋ね教えていただいた」とあるように、参加した高齢者は野菜や花の知識が豊富であった。植物の知識が乏しい職員は高齢者から教えてもらうことが多かった。そのため、園芸療法プロジェクトの効果かどうかわからなかったと考える。

以上、述べてきたように園芸療法プロジェクトのメリットとして、専門職（作業療法士）が関わるため、

①作業機能障害の評価が実施できること, ②園芸活動の活動場所の確保が容易になること, ③園芸活動を行う時間の確保が容易になること, ④参加者の選定が効果的に行えることがあげられる。①～④に加えて, 園芸療法プロジェクトの仕組みによって解決できることとして, ⑤園芸活動のスムーズな導入, ⑥経費の確保, ⑦マンパワーの確保, およびそれによって支援者が参加者に関わる時間や支援者同士での振り返りの時間が持てたこと, ⑧参加者のリスク管理, ⑨他部署から理解が得られやすいことである。職員はこれらのメリットを感じることできたため, 園芸活動に対して肯定的な意見を持つようになったと考えられる。

今後は, 園芸療法プロジェクトの実施における施設利用者への職員の関わり方の変化, および利用者の施設生活の変化について調査していこうと考える。

## 摘 要

著者らは, 園芸活動実践に関する課題を解決しながら園芸活動を実施・継続していくために, 大学と特別養護老人ホームが連携した体制を構築し, それを園芸療法プロジェクトと名付けた。本研究の目的は, 施設職員が感じる園芸療法プロジェクトの効果について, アンケート調査により明らかにすることであった。特別養護老人ホームで園芸療法プロジェクトへの参加経験があり, 支援者として関わったことのある職員20名に対し, アンケート調査を行った。その結果, 実施方法については, 職員からは頻度や実施日について要望があったが, 施設と大学との連携については, 職員全員が大学と連携することのメリットを実感していた。具体的な園芸療法プロジェクトのメリットとしては次のことが挙げられた。専門職(作業療法士)が関わるため, ①作業機能障害の評価が実施できること, ②園芸活動の活動場所の確保が容易になること, ③園芸活動を行う時間の確保が容易になること, ④参加者の選定が効果的に行えることがあげられる。①～④に加えて, 園芸療法プロジェクトの仕組みによって解決できることとして, ⑤園芸活動のスムーズな導入, ⑥経費の確保, ⑦マンパワーの確保, およびそれによって支援者が参加者に関わる時間や支援者同士での振り返りの時間が持てたこと, ⑧参加者のリスク管理, ⑨他部署から理解が得られやすいことである。職員はこれらのメリットを感じることできたため, 園芸活動に対して肯定的な意見を持つようになったと考えられる。今後は, 園芸療法プロジェクト実施における施設利用者への職員の関わり方の変化, および利用者の施設生活の変化について調査していきたい。

## 謝 辞

本研究の実施にあたり, アンケート調査にご協力くださいました施設の方々, 園芸療法実践に協力をいただきました作業療法学科のゼミ学生に感謝申し上げます。

## 引用文献

- 藤田政良・萩原 新. 2003. 長野県下の福祉施設および医療施設における農・園芸活動の実態と療法的活用に関する調査研究. 信州大学農学部AFC報告 1: 35-50.
- 神田啓臣・吉田康徳・久能幹雄・小瀧みゆき・山本祐一・榮田馨織. 2019. 福祉施設における園芸活動を持続的活動とするための実践事例 スタッフ体制の構築と活動プログラムの考案. 秋田県立大学ウェブジャーナルA 6: 61-70.
- 神田啓臣・高橋春實・吉田康徳・久能幹雄. 2014. 福祉施設および精神病院における園芸活動の効果, 導入とスタッフの意識に関する考察. 人植関係学誌. 14(1): 27-33.
- 吉備国際大学園芸療法プロジェクト. 2017. 平成29年度 地(知)の拠点整備事業 年度末報告書 pp. 9-12.
- 小浦誠吾. 2013. 日本における園芸療法の現状と今後の可能性. 園芸学研究 12: 221-227.
- 小浦誠吾・長江嗣朗・原隆志. 2006. 園芸実習および園芸療法実習前後の学生の感情変化に関する研究. 九州大研報(自然) 36: 21-30.
- 小浦誠吾・古川千栄子・山岸主門・野村次朗. 2002. 老人福祉施設において園芸療法を用いたボランティア活動に参加した大学生の意識調査. 人植関係学誌. 2(1): 29-33.
- 小浦誠吾・内山晶代・野村次朗・牧野 明・土屋利紀. 2001. 高齢の脳梗塞患者への園芸療法の実践事例. 人植関係学誌. 1(1): 25-27.
- 増谷順子. 2012. 園芸活動における軽度～中等度の認知症高齢者の個人特性を生かした支援方法の検討. 日本認知症ケア学会誌 11: 576-589.
- 増谷順子・太田喜久子. 2015. 施設高齢者の園芸活動を支援した職員の意識・行動変化. 人植関係学誌. 15(1): 19-24.
- 三宅優紀・岩田美幸. 2020. 特別養護老人ホームにおける高齢女性に対する作業機能障害の種類に焦点を当てた評価および介入 -園芸活動を用いた実践-. 作業療法 39(3): 341-347.
- 三宅優紀・京極 真・小浦誠吾. 2017. 高齢者施設における園芸活動の実態調査: 作業機能障害の視点から. 人植関係学誌. 16(2): 7-14.

- 三宅優紀・京極 真・松田 勇. 2014. 我が国における高齢者に対する園芸療法実践の現状に関する文献研究. 吉備国際大学保健福祉研究所研究紀要 15 : 21-27.
- 大竹正枝・古橋 卓・前田智雄・鈴木 卓・大澤勝次. 2008. 札幌市内福祉施設における園芸療法および園芸活動の今後の課題. 人植関係学誌. 7(2) : 31-37.
- 澤田紘太郎・岩田美幸・佐野伸之. 2019. 通所介護施設において園芸活動がQOLに与える影響－農村体験型施設と通常型施設での検討－. 日本作業療法学会抄録集 53 : 1160-1160.
- 杉原式穂・青山 宏・杉本光公・竹田里江・池田 望・浅野雅子. 2006. 園芸療法が施設高齢者の精神面, 認知面および免疫機能に与える効果. 老年精神医学雑誌 17(9) : 967-975.
- 寺岡 睦・京極 真. 2014. 作業に根ざした実践と信念対立解明アプローチを統合した「作業に根ざした実践2.0」の提案. 作業療法 33 : 249-258.
- 寺岡佐和・小西美智子・原田春美・小野ミツ・宮腰由紀子. 2012. 認知症高齢者を対象とした園芸活動が認知機能および心理社会的機能に及ぼす影響の検討. 広島大学保健学ジャーナル 11 : 10-19.
- 東方和子・澤田みどり・生田純也・新野直明. 2010. 通所介護施設における虚弱な高齢者向け園芸活動プログラムの効果. 老年学雑誌 1 : 29-38.